

～九月の投句一覧から私が選んだ七句～

◆ 湯桶もて前を押さへて御慶かな / 吉野香風子

温泉場、銭湯での情景。裸で新年の祝辞を交わす滑稽な設定は、ユニークな発想で自ずと笑いが込み上げる。この様に笑いを抑えて「さらり」と詠むには、それ相応な力量を必要とする。何か艶な雰囲気を醸すのが卓抜。

◆ 家計簿の小銭の合はぬ良夜かな / 越前春生

仲秋の名月の夜に、集計の小銭が合わぬとは残念。家計簿などは捨ておいて、仲秋の天体ショーを観て欲しい。取り合わせが妙で、十五夜に家計簿に取り組む作者の姿がなんとも微笑ましい。

◆ 敗戦忌貧乏人は米を食ふ / 飛田正勝

戦後六十三年。昔、総理が「貧乏人は麦を食え」と言ったが、今や輸入米の玉蜀黍や麦が高騰し、揚句のような有様になった。事故米が堂々と販売され、米食も安心できない。敗戦忌を配し、現代世相を存分に風刺した作品である。

◆ 関節のどこも硬くて茄子の馬 / 日根野聖子

人間加齢と共に、あちこちの関節や頭も硬くなる。これは宿命だが、それを自嘲せず、前向きに生きたいものである。茄子の馬を据えて、人世の悲哀を明るく詠まれた。

◆ 後期には高貴な暮らし冷奴 / 安藤淑子

後期高齢医療で後期老人がクローズアップされた。年金ではとても高貴な暮らしは無理だが、気分だけは高貴でありたい。措辞と冷奴との取り合わせが卓抜で、可笑しみが倍増した。痛烈な世相風刺にもとれて愉快である。

◆ 大漁も不漁もなく海月かな / 稲沢進一

海月の浮遊は一見長閑。だが海月は漁業者にとり大敵。越前海月の来襲は漁業に致命的な被害を与える。「大漁も不漁」もなく、網を揚げると海月ばかり、海月の

登場で諧のある句となった。

◆ **完熟の桃のおしりの皮をむく** / 高橋真紀子

商店で桃を買う時、筆者は必ず桃のお尻を見る。
ピンクで産毛の生えたお尻は、赤ちゃんのそれを思わせる。
また女性のお尻をも連想させ誠に艶っぽい。
この句の眼目は「お尻の皮をむく」で、発想がよく明るい
ユーモアが楽しい。